

ロシアのシベリア進出と都市建設

田 辺 三千広

今年度の星城大学公開講座の共通テーマはご案内のとおり「交流」です。一口に「交流」と申しましても色々な観点が考えられます。私の専門は歴史学です。しかも日本人にはまったくといってよいほど関心をもたれない「ロシア中世史」です。本当でしたら、自分が長く勉強してきた15世紀末期のロシアの歴史の中から本日のテーマにあったお話ができればよかったのですが、星城大学になって公開講座で初めてお話するチャンスをいただき、最初から眠気を催すような退屈な話になっては今後の出世に響くと思いますから、ロシアの古い歴史については次回（もし、チャンスがあればですが）にしようと思います。とは申しましても私にはロシアの歴史についてしかお話をすることもできません。そこで今日は昨年訪問しましたシベリア中央部にあります美しい都市クラスノヤルスクへの旅についてお話と御報告をさせていただこうと思います。もちろん、旅行の報告だけでは公開講座にはなりませんから、そこに少しだけ歴史学的な話、特に、最近始めましたシベリアの歴史の研究成果を交えてお話を進めて行きたいと思います。

私は、これまで何度もロシアを訪れてきましたが、自分の研究分野の関係でモスクワ周辺がほとんどでした。4年前、あるちょっとしたきっかけで、愛知県の私的なロシアとの友好を目指す団体と出会いました。「日本とロシアの友好と親善を進める愛知の会」といいます。（以下、「愛知の会」と略。）この会は、愛知県の県会議員の有志が超党派でロシアとの友好関係を促進しようと結成されたようです。第二次世界大戦後、シベリアで抑留され、そこで亡くなった日

本人の冥福を祈るため、クラスノヤルスク市に慰霊碑が建立されました。2001年夏、「愛知の会」ではこの慰霊碑の除幕式とクラスノヤルスク市とのよりいっそうの友好を促進するための訪口団が派遣されました。私もその訪問団に加わりましたが、それがシベリアの地を踏んだ最初でした。

初めてのシベリア旅行は疲れが先に立ち、シベリアの自然と文化の豊かさを実感するところまでは参りませんでした。疲れの原因は飛行機でした。成田からモスクワまで約10時間、モスクワで入国し、国内線の空港に移動し、そこでかなりの時間待たされました。モスクワからシベリアの中央部に位置するクラスノヤルスクまで4時間の飛行でした。ホテルに到着して30分で着替え、州の議員との懇談や市内見学と続けました。成田を8月15日の12:00に出てから翌日の夜までほとんど睡眠もとれず、へとへとになりました。(時差は4時間)

この訪問団には三つの目的がありました。一つはクラスノヤルスク市長への表敬訪問、二つ目は、先の慰霊碑の除幕式と墓参、三つ目は、露日協会クラスノヤルスク支部との今後の交流のあり方を協議し、協定書を結ぶことでした。私はそのいずれにも関係がなく、ただついていっただけでした。この旅によってシベリアを実感することはあまりできませんでしたが、この訪問団に参加された方々から、いろいろなことを教えられ、新たな体験をたくさんすることができ、また、人的交流も広がりました。帰国後も訪問団の参加者の皆さんとは親しくお付き合いさせていただいていますし、「愛知の会」の行事にもしばしば参加するようにもなりました。

シベリアについてそのすばらしさの一端を垣間見たのは、私にとっての二度目の訪口団に参加したときのことでした。「愛知の会」では隔年にシベリアのクラスノヤルスクに訪問団を送りますが、今回は第四次訪口団になります。この訪口団が計画されるちょっと前に私は会の事務局に相談を持ちかけていました。星城大学で入学以来私に個人的にロシア語を習ってきた学生が、3年生になったので、一度ロシアを体験させたいから協力してもらえないだろうかとい

うお願いでした。「愛知の会」では、次回の訪問団を学生中心のものにしてはどうかとの提案があり、そこで日本人学生とロシア人学生の討論会のようなものを計画することになりました。そこで、今回の訪口団の団長を務めた私の友人で愛知県立大学教授の加藤史朗先生と二人で学生募集を始めました。広く愛知県下の大学に募集のチラシを撒きましたが、結局、愛知県立大学の学生が3人、早稲田大学から2人、わが星城大学からは3人の学生が応募してきました。こうして、8名の学生を含め総勢18名の第四次訪口団が結成され、シベリアを目指しました。

前回と違い、今回の旅は比較的楽でした。関西空港を午後2時に出発し、2時間でウラジオストック、そこから2時間でイルクーツクに到着し、そこで2泊しました。さらに、2時間でクラスノヤルスクです。日程的にはとても楽な旅になりました。

シベリアを訪問する前の私のシベリアに対するイメージは、ロシアについて学び始めた学生のロシアに対するイメージと変わりませんでした。私は、毎年星城大学だけでなく他のいくつかの大学でもロシアの歴史について講義をしています。最近を読むのが面倒で課題を出しません、以前はよくロシア史についてのレポートを課しました。多くの学生の書き出しはこうでした。「私はロシアのことは何も知りません。イメージとして浮かぶのは遠い国、寒い国、暗い国というようなことだけです」。私のシベリアに対するイメージも同じようなものでした。しかし、実際にシベリアを訪れてみるとまったく違っていました。日本では、シベリアといえば豊かな自然、森林資源、天然資源の宝庫と考えられています。それはそうでした。しかし、それ以外にも農産物、海産物も豊富で、豊かで文化的な暮らしを見せつけられました。特に農地の肥沃さには驚かされました。シベリア南部はウクライナから続いている国土地帯だそうです。この後「ロシアのシベリア進出」でもお話ししたいと思いますが、ロシア人がシベリアに向かったのは毛皮を求めてだけではなかったような気がします。

シベリアを訪問して感動した一つでした。

旅にはいつも大きな発見、大きな感動があります。ですから古今東西を問わず、また、年齢を問わず旅に人生を求める人が多いのでしょう。今回のシベリア旅行でも多くの貴重な体験をすることができました。

クラスノヤルスクは二度目の訪問になりますが、今回もまた驚きの連続でした。特に書物を通じて知ってはいましたが、ロシアの古い慣習である客を歓迎する儀式「パンと塩」⁽¹⁾で出迎えを受けたのは初めてでした。それも二度にわたって体験できました。

ロシアの「もてなし」は、他のヨーロッパ諸国とは異なるようです。初めてソ連旅行に出かけたときからずっと気になっていたことがあります。ソビエト時代、団体旅行・個人旅行にかかわらず、必ず空港に出迎えがあり、ホテルまで連れて行ってくれました。これはサービスというより外国人が勝手な行動をとらないように見張るためだとばかり思っていました。その後、ロシア中世史の勉強を続けていくと、同じようなことが古くから行われていたことに気づきました。外国の使節などがモスクワにやってくる時、モスクワ大公はその領地を治めている貴族に国境まで迎えに出かけさせました。そしてモスクワまでの間の領地の貴族に順々に使節を護衛させ、自分のところまで安全に案内させました。⁽²⁾ ちょうど我々を空港に出迎え、市内のホテルまで安全に連れて行ってくれるのと同じでした。つまり、このもてなし方は何もソビエト時代に始まったものではなく、ロシアの人々が古くからおこなってきた伝統なのでしょう。

ここで本日のメインテーマであるクラスノヤルスクでの活動に話を戻しましょう。今回の第四次訪口団の目的の一つは、日本人学生とロシア人学生の討論会と交流でした。討論会の会場は、クラスノヤルスク大学日本文化センターに用意され、日本語を勉強しているクラスノヤルスク大学の学生 18 人と副学長、数名の教授が参加してくれました。

《討論会概要》

日 時： 2004年 8月31日

場 所： クラスノヤルスク総合大学内日本文化センター

参加学生： 日本人学生 8名（愛知県立大学3名、星城大学3名、早稲田大学2名）

ロシア人学生 18名（うち17名は同大学日本語学科の学生、1名は他大学医学部）

テ ー マ： 「現代の若者 日本とロシア」

14時に同大学日本文化センター（以下、センターと略記）に到着。盛大な歓迎を受ける。この訪問は討論会のためだけでなく、センターへの公式訪問をかねていたため、学生だけでなく同大学の副学長以下数名の教員も出席して下さる。日本側も司会者の田辺と学生のほかに訪問団の他の参加者も共に参加（団長以下4名は市役所表敬訪問のため途中参加）。さらに、クラスノヤルスク教育大学の副学長のモスコヴィチ氏も司会に加わる。

最初にクラスノヤルスク総合大学の副学長の挨拶。通訳はロシア人学生オーリヤさん（5年生）。返礼は何も考えていなかった田辺が日本語で。その後二人の同大学の先生から歓迎の挨拶。その後早速討論に移る。はじめに田辺が日本語で基調報告（日本語原稿を配る）。

これより討論に入るが、テーマが自由論題に近いものであったためなかなか手が挙がらない。そこでまず日本人学生に順番に自己紹介を兼ねて日本での自分の生活について簡単に話してもらう。

日本人8人の自己紹介が終わったあとでロシア側から多くの質問が出される。

どうしてロシア語に興味をもったのか。

ロシアのどのような所が好きか（場所）。

いつ日本に帰るのか。

クラスノヤルスクで勉強をしますか。

ロシアの料理は好きか。

ロシアの小説は好きか。

ロシア人はディスコが好きだが、日本ではナイトクラブ（ディスコ）によく行くのか。

日本でのロシア語教師は日本人なのかロシア人なのか。

これらに対して日本人学生から活発な答えがあった。

続いてロシア人学生の自己紹介。大部分の学生は卒業後は日本に行ってみたい、日本語、特に文法と漢字が難しい、しかし、日本文化に興味があるので日本語を勉強しているという発言であった。なかには芥川龍之介、川端康成の小説が好きだという学生もいた。われわれは全員日本語で発言したが、ロシア人学生のほうは全員日本語で発言した。日露の語学教育の差を見せつけられた。

1時間半ほど経過し、教育大学副学長のほうから終わりの挨拶をいただき初めての試みは無事終了。テーマを限定しなかったことからまとまりのない会になってしまったが、両国学生も積極的に発言し、協力的であった。特にロシアの学生はこれまで日本人との接触が少なかったせいか、我勝ちに発言をしていた。学生同士の交流の第一歩としては成功したのではないか。その後全員でバスに乗り、市内のショッピングセンターで買物（同行の我々とは別行動）、ホテルでの夕食、三グループに別れての夜間の外出と続く。ロシア人学生も夜遅くまでもてなしてくれたようだ。夜11時には学生全員がホテルに戻っていることを確認し、団長の加藤史朗先生（愛知県立大学教授）も安心して眠りに就かれた。

翌日、これも今回の旅の目的の一つ、「シベリアの自然と文化に親しむ旅」を満喫する企画が相手側の好意により実現しました。クラスノヤルスク市から約 200 km離れた郊外のノヴォセロヴォ村への遠足でした。とちゅう、ダムや水力発電所のそばを通り、パトカーの先導で村に到着しました。パトカーは我々のバスを市内のホテルから交通渋滞にもかかわらず、前の車を蹴散らしながら先導してくれました。まるで、VIP 扱いでした。

村に到着すると盛大な村人からの歓迎を受けました。なかなか個人の調査旅行では味わえない歓迎ぶりでした。その後、マンモスの骨が良く発掘される湖の遊覧、実際のマンモスの骨を触りながらの考古学的解説、村民との歓談、ロシアの蒸し風呂体験、村あげての夕食会と大変盛りだくさんの遠足となりました。それとこの地域は先に述べました黒土地帯であることも分かりました。農産物も豊富で村の人々も生き生きしているのが印象的でした。

はじめにも言いましたが、今回のこの旅が私にシベリアの歴史に興味を抱かせるきっかけとなりました。帰国後、早速材料を集め、『シベリアのロシア進出と都市建設』という題で論文をまとめにかかりました。もちろん、研究を始めたばかりで、論文というのは名ばかりで、多くの疑問にもまったく答えられない惨めな論文でしかありませんが、今後も研究を続けていく上での第一歩を踏み出したということでしょう。ここにその一端を紹介したいと思います。⁽³⁾

ロシアのシベリア進出

ロシアのシベリア進出は、16世紀、モスクワ大公イヴァン四世雷帝の時代に本格的になります。それ以前にもロシアの商人たちが黒テンの毛皮を求めて西へと進出しましたが、それは他民族の居住する土地を支配するといった拡張主義的なものではありませんでした。さらに、1240年ごろのモンゴル軍の東ヨーロッパ侵略によって、ロシアの東方への動きは完全にくいとめられました。

約 200 年間、ロシアはモンゴルの支配を受け、その間ロシア人は苦しめられ

ます。14世紀末期ごろから、徐々にロシアとモンゴルの力関係が変化してきます。そして15世紀末期にはモスクワ大公イヴァン三世が完全にモンゴルの支配から脱却することに成功しました。

こうして彼の孫のイヴァン四世（1533 - 84）の時代になりますと、逆に、モンゴルが建てていた国々を征服していくことになります。これによって東への進出が可能になって行きました。

ウラル山脈を越えて、東へ向かう中心になったのはストロガノフ家でした（わが国でもその名はビーフ・ストロガノフで知られています）。ストロガノフ家は、15世紀末期、モスクワの北のヴィチェグダ地方で活躍した裕福な商人であり、実業家でもありました。1550年までにアニカ・フョードロヴィチ・ストロガノフが事業の基盤を作り、製塩業、鍛冶屋、製材も手がけ、さらに、塩、魚、穀物、毛皮の取引を通して財を蓄えていきました。アニカの息子たちが成人すると彼らが父を助け、事業を東方へと広げていきました。

東方への進出が本格化したのは1558年でした。息子の一人グリゴリーは、ツァーリ（皇帝）イヴァン四世にカマ川流域の開墾を願い出ます。イヴァン四世は特許状を与え、砦を建設し、大砲を備え、私兵を雇うことを許します。さらに、20年間の免税特権も与えました。

このように初期の進出はストロガノフ家が中心となって進められました。彼らは地域の原住民との衝突を生みがちであったことから、砦を築き、私兵を雇いました。私兵にはコサックの兵が雇われました。なかでもコサック隊長エルマークの活躍は有名です。

14 - 17世紀のロシアでは、国税を免除されていた自由人の労務者、あるいは、辺境地帯で軍務についていた特別身分のものをコサックと称しました。15世紀後半以来農民や商工民の中でさまざまな束縛を嫌い、南部や南東部の辺境地帯に逃亡するものが増えてきます。彼らも自分たちをコサック = 自由人と称するようになります。そして、自衛のために集団化し、団体を組織するようになります。

ました。15-16世紀によく知られたコサック集団にはドン・コサック、ヴォルガ・コサック、ヤイク・コサック、ウクライナ・コサックなどがありました。モスクワ国家は、これらコサックの団体に注目し、彼らを辺境の国境警備の仕事に雇い、そして、給料、武器、食料を支給し、国家の勤務者としました。

イヴァン四世の息子フョードル帝の時代には、シベリアの都市（砦）建設は国家的な事業になったようです。最精鋭部隊であった従兵隊をつぎ込んで、どんどんと東へ東へと進出していきました。

1586年	チュメニ	1627年	クラスノヤルスク
1587年	トボリスク	1631年	ブラーツク
1601年	マンガゼア	1632年	ヤクーツク
1604年	トムスク	1649年	オホーツク
1618年	クズネツク	1652年	イルクーツク
1619年	エニセイスク	1653年	ネルチンスク

こうしてシベリア開発がなされていきました。

クラスノヤルスクの建設

「愛知の会」と定期的に交流を持ち、深めているクラスノヤルスクはどのようにして建設されていったのか。そのことを示す史料が残されていることから、今回の論文ではこの都市の建設の様子を紹介しました。ちなみに、クラスノヤルスクとは、「赤い谷」という意味です。飛行場から市内へのバスの車窓からは確かに赤土の岩肌がずっと見られます。その光景を見て昔のロシア人はそのように呼んだのだと思われます。時々私はロシア人を案内しますが、東海市から車で常滑市に行く途中、そのような光景を目にし、ロシア人には、「常滑は日本のクラスノヤルスク」と説明します。クラスノヤルスクでの都市建設は当

初はもちろん毛皮を求めてのものでした。しかし、毛皮を求めてだけなら、中継地点のような小規模な商館の建設で十分だったはずです。しかも、都市となると軍人や政府の役人・聖職者とその家族や家臣のほかには彼らが生活するためのさまざまな施設、彼らの生活を支える職人や農民が移り住んでくる必要があります。多くの人々がそこで生活することになります。もしシベリアが不毛の大地であり、食糧供給が困難であったなら、そのような危険を冒してまで進出する意味がないのではないのかというのが私の素朴な疑問でした。シベリアが毛皮や材木だけでなく他の産物、特に、農産物でも豊かな大地であったからではなかったからではないかと考えました。もちろん、簡単には答えの出ない問題だとは思いますが、これからも勉強を続けていくつもりです。今日は、クラスノヤルスクの建設当時の様子を紹介するにとどめて起きます。

エニセイ川上流のクラスノヤルスクにオストローク острог(砦)を建設するように皇帝から命じられたのはアンドレイ・ドゥベンスキーという人でした。彼には1627年6月1日付けの指令書が政府から交付され、詳細に都市建設の手順が示されました。

新しいオストローク建設を命じられたアンドレイ・ドゥベンスキーは、1587年にエルマーク率いるドン・コサック軍によって建設されたトボリスクとその他の町で自分と共に遠征に参加する国家勤務者 служащие люди、アタマン атаман(コサック隊長)、コサック兵を選出しました。彼らには2年間という期限付きで給料と食料が支給されました。

給料と食料を受け取ったアンドレイ一行は、エニセイスクのオストロークに向かいました。そして、そこからカチン人(チュルク語系の民族)の土地に入っていました。彼らへの指示は、エニセイ川のほとりのクラスノイ・ヤールにオストロークを建設し、堀をめぐらし、防御を固めることでした。次に彼らが求められたことは、現地住民をロシアのツァーリ(皇帝)の支配下に入れ、ツァーリに忠誠を示させ、ヤサーク(毛皮税)を収めさせることでした。その

際できるだけ武力を行使しないようにとも指示されました。また、住民に耕作をさせるようにとも述べられています。

これらがドゥベンスキーに求められた主な指示でしたが、このほかにもその後のオストロークの管理・経営についても細かく指示が出されました。例えば、（１）周辺住民の調査、（２）コサック兵の給料と食料、（３）トボリスクからクラスノヤルスクまでの道順、（４）途中での越冬の仕方、（５）周辺の現地住民対策、（６）同伴してきた勤務者や兵士の監視と監督などでした。そして、最後に、アンドレイ本人に対する注意が書かれていました。すなわち、この指令書に書かれていることが、もし、本人の怠慢や不注意で実行に移されなかった場合、彼はツアーリから大いなる失寵を被ることになるだろうということでした。

以上がクラスノヤルスク市の前身であるクラスノヤルスク・オストローク建設の概略でした。この史料からわかることはオストローク建設のいきさつだけでなく、ここでは触れませんでした、（１）現地住民をむやみにキリスト教徒に改宗させない、（２）現地住民からヤサーク（毛皮税）を徴収することが主な収入源ではあるが、それ以外にも農耕のための耕地を探させているという点でした。史料の指令からわかることは、当時、ロシアがシベリアに進出した目的は毛皮を求めてのものであったことは言うまでもなく、それに加え肥沃な耕地を求めたものでもあったといえるのではないのでしょうか。

註

- (1) 昔ながらのもてなし方。客に歓迎の意を表し、大型の円パンの上に塩をのせて出迎える。
- (2) 拙稿「ホーセイの『モスクワの記録』」 宮崎揚弘編 『続・ヨーロッパ世界と旅』 法政大学出版局 2001年 150ページ
- (3) 拙稿「ロシアのシベリア進出と都市建設」 安村仁志編 『東シベリアの歴史と文化』 成文堂 2005年 47-64ページ



《パンと塩》(クラスノヤルスク空港にて)

* 本稿は2005年5月21日(土)におこなわれた星城大学公開講座の原稿に加筆したものである。